

## 「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に」

(マタイによる福音書22:15-22)

「皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか、適っていませんでしょうか。」ファリサイ派の人々が主イエスに問いかけました。この問いかけは非常に巧妙に仕組まれた罠です。当時イスラエルを支配していたローマ帝国へ税金を納めることは、ユダヤ人にとっては経済問題であると同時に宗教的な問題でした。当時、ローマ皇帝は神格化され始めていたからです。神格化された人間に税金を収めるとなると、それはイスラエルの神への背信行為になってしまいます。ですから、もしも主イエスが「皇帝に税を納めるべきだ」と答えれば、ローマの支配を認め、神以外のものを神とする不信仰者であると、主イエスへの人望を失墜させることができます。逆に否定すれば、ローマへの反抗者として主イエスを訴えることができます。いずれの答えをしても、主イエスを陥れることができる恐ろしい問いかけです。

彼らの間に対し、「偽善者たち」と答え返した主イエスは、彼らの悪意に気付いています。主イエスに「税金に納めるお金を見せなさい」と言われた彼らは、デナリオン銀貨を差し出しました。そこには神格化されたローマ皇帝の像が刻まれていますから、この貨幣を彼らが普段用いているなら、それは彼ら自身が神を冒瀆していることとなります。彼らは銀貨を差し出すことによって、普段の生活では何ら疑問を抱くこともなくこの銀貨を使用していることを暴露してしまいました。日常生活では貨幣に刻まれた皇帝の像を問題にしないのに、主イエスを罠にかけるために敬虔ぶる彼らはまさに、「口先では神を敬うが、心は遠く離れている」偽善者です。

主イエスの、「皇帝のものは皇帝に。神のものは神に返しなさい」という言葉にある「もの」とは「刻印」のことです。主イエスは、「皇帝の刻印は皇帝に、神の刻印は神に返しなさい」と伝えたのです。刻印という単語は「エイコーン」というギリシャ語で、「似姿」とも訳されます。創世記において、神はご自分の似姿として人間を造られました。人間には神の似姿が刻まれており、神の言葉がその心に刻まれています(創世記1:26、エレミヤ書31:33参照)。ファリサイ派の人々は硬貨に刻まれたローマ皇帝の刻印は見えているのですが、自分自身が「神の似姿」であることを忘れてしまっています。主イエスは「神のものは神に」と言うことで、他ならぬ「あなた」に神の像が刻まれていることを思い起こさせ、「神の刻印があるあなた自身を、神にささげなさい」と伝えたのです。主イエスはこうして、自らを陥れようとしたファリサイ派の人々をも、まことに神に従う道、神の似姿として、神に自らをささげ、神とともに生きる道へと導こうとされたのです。

今日、他ならぬわたしたち自身も、神の似姿として造られていることを思い出しましょう。わたしたちは神の似姿として、神の刻印を受けたものとして、自らを神にささげて生きることが求められています。日々を省みましょう。他の刻印を神以上に大切にしていないでしょうか。口先では神を敬いながら、現実の生活では神か

ら離れて行動していないでしょうか。様々な人間的な思いに絡め取られてしまうわたしたちですが、神の声をこそ聞き、神の似姿であるわたし自身を神にささげて生きていくことができますように。

#### ※「偽善者」

古典ギリシャ語の元来の意味は「演劇の役者」。この意味が悪い方に転じて「上辺を偽る者、偽善者」を表す。聖書において「偽善」とは、本心を隠して上辺を繕う態度のことばかりでなく、そのような態度の根底にある神を否定する心をも指し、口先では神を敬うが、現実の生活では神から離れて行動する者を意味する。

熱心に律法を守り、神に従って生きようとしたファリサイ派の人々であったが、神を敬っているようでありながら、日常生活では皇帝の像が刻まれた貨幣を疑いなく使い、また彼らは人頭税を納めさせるローマ帝国のように、神殿税を人々から取り立て、地上の組織を維持することに一生懸命になっていた。そのことに懸命になるあまり、主イエスに背を向け、神の心を教えるメシアを排斥しようとしてしまった。

昔のことだが、女性の権利や活躍を声高に訴える男性が、家に帰るとふんぞり返って亭主関白、という話を聞いたことがある。信仰においても、信条においても、自らの日頃の思いや行動が伴うことが大切なのだと、心に刻みたい。